Honda の交通安全情報紙　SJ 2021 年 夏号 6 月 30 日発行

SJ

The Safety Japan
since 1971

2021 SUMMER NO.505 夏号

Safety Report　セーフティルポ　若者

中学生の主体性を育てながら安全意識を高める授業を展開

Honda は様々な年代や社会のニーズに合わせた交通安全教育プログラムを開発し、地域の交通安全指導者や学校などに提供している。その一つ、小学校高学年・中学生を対象としたプログラムを活用し、目黒星美学園中学高等学校（東京都世田谷区）が中学 1 年生を対象に交通安全教育を実施した。

オンライン授業期間だったため、Zoom（パソコンやスマートフォンなどを介して会議やセミナーに参加できるアプリ）を活用し、生徒は自宅から授業に参加。生徒の挙手などは京さんがノートパソコンの画面上で把握できるようになっている

オンライン授業で Honda のプログラムを活用

目黒星美学園中学高等学校は今年 1 月から 2 月にかけて中学 1 年生の学年活動として交通安全教育の授業を行った。この授業には（一財）日本自動車研究所（JARI）自動走行研究部主任研究員 大谷亮さんと Honda が協力している。

今回の活動の中心となった同校社会科教諭の京（きょう）百合子さんは、交通安全教育について研究している JARI の大谷さんの話を聞いたことが実施のきっかけだったと振り返る。

「交通ルールを知っていても危険な行動をしてしまうことがあるなど、子どもが交通事故に遭う背景をうかがって、交通安全教育に関心を持ちました。交通社会は生徒にとっても身近な題材で、自分自身が交通事故の被害者や加害者という当事者になる可能性があります。本校は東日本大震災以降、防災教育に力を入れてきましたが、併せて生徒により身近である交通安全教育にも取り組もうと考えました」。

2020 年度はコロナ禍で様々な学校行事が中止となったが、生徒の心に残る体験をさせてあげたいと考えていた。そのため学年活動の時間を利用し、交通安全教育の授業を計 4 回実施することにしたのである。

交通安全は「大人に言われたからやる」というのでは意味がないと考え、京さんは生徒の主体性を育てるための授業を企画し、「自分の登下校の安全を守りながら、交通事故が起こらない社会をつくるにはどうしたら良いのか」というテーマを設定。その導入に Honda が開発した小学校高学年・中学生向けプログラム「将来社会で活躍する君たちへ※」をアレンジして活用した。

計 4 回の授業は Zoom によるリモート（写真参照）で 3 クラス同時に進められた。1 回目は「歩き」をテーマにした映像を視聴。映像は中学生が家から目的地の塾まで友人と歩いて向かうというストーリー。その中に歩きながらのスマートフォン（以下、スマホ）操作や道路への飛び出しといった交通ルール・マナーに違反している NG 行動が出てくるので、NG だと思ったら生徒は挙手で意思表示する。そして日頃、同様の行動をしていないか、自分だったらどのように対応するかを各自の視点で考えてもらう。2 回目、3 回目はクラスを越えた 4 ～ 5 人のグループに分かれ、日常の交通場面で NG 行動をしてしまうのはなぜなのか、そうした行動をしないために自分たちができることは何かを話し合う。JARI の大谷さんもゲストとして参加し、交通心理学の講義を行った。そして、最後となる 4 回目に各グループの代表者が討議の結果を「My 交通アクション」として発表した。

※ 社会生活を豊かに送る上での基本である「ルール・マナーを守り、習慣化させる」ことで、次代を担う子どもたちが交通安全を自分事ととらえ、事故に遭わないようにすることを目的とした交通安全教育プログラム。「歩き」「自転車」「標識」の 3 つのテーマで構成されている。「歩き」「自転車」では、やってしまいがちなルール・マナー違反の映像を見せた後、指導者が児童・生徒に問いかけ、色々な意見を引き出しながら進められるようコーチングの手法を取り入れている。詳細は以下のホームページ参照。
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/teaching_materials/child/

Contents

P1　Safety Report セーフティルポ 若者
P2　Close Up クローズアップ 教育手法
P3　Safety Report セーフティルポ 自転車
P4　Close Up クローズアップ 交通教育センター
P5　Close Up クローズアップ 教育機器
P6　SJ Interview 東北工業大学 教授 小川和久さん
P7　TRAFFIC SCOPE 交通参加者の行動を観察する
P8　危険予測トレーニング（KYT）
SJ クイズ

SAFETY-JAPAN

Safety for Everyone

Honda はすべての人の
交通安全を願い活動しています。

SJ ホームページは　ホンダ　SJ　検索

編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒 107-8556 東京都港区南青山 2-1-1
TEL：03(5412)1736
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/
編集人：鈴木英樹

※ご不明な点がございましたら、下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ安全運転普及本部係
TEL：03(5439)1191
E-mail：sj-mail@spirit.honda.co.jp

生徒自身が考え、他の生徒と話し合うことで理解が深まる

発表の中で多かったのは歩きスマホに関するもの。ある生徒は「今の私たちにとって歩きスマホの問題が現実的。まわりに迷惑がかかる、まわりから見ても不快という点からまわりの人のことを考えて行動したい。一人ひとりが行動すれば、だんだんと拡がっていくと思うので、正しい行動を自分からしていきたい」と発表。歩きスマホを防ぐ方策として「歩いている時は電源をオフにする、手の届きにくいところにしまう」「冬場はスマホの操作ができない手袋をあえてすることで、歩きスマホをする人が少なくなるのではないか」という提案があった。
4 回の授業を終えた生徒に感想を聞くと、「歩きスマホは高齢の方や障がいのある方に対して危険であることに気がつきました。自分の行動が周囲の人々に対して、どのように映っているか、自分のことだけに集中して行動していたら、まわりから迷惑と思われてしまいます。まわりを危険に巻き込んだり、自分も危険なことに巻き込まれる、そうしたことを意識して、しっかり行動したいと思いました」（中 1 大河内さん）、「交通事故は人が原因で起きていることを知って、自分にもその可能性があるという認識が生まれ、交通事故に対する危機感が以前より高まりました。見通しの悪い曲がり角では『自分がここで確認せずに飛び出してしまったら、どうなるんだろう』と予測するようになりました。安全確認という行動も大切なのですが、意識も大切だと思います」（中 1 金澤さん）と答えてくれた。
同校の交通安全教育に協力した大谷さんは、継続的に 4 回実施したことに意義があると評価する。「生徒自身が考え、生徒同士で議論することによって交通安全への理解が深まり、行動変容を促す良いきっかけになったのではないでしょうか。今回の授業の効果を検証したいと考えています。生徒の皆さんが気づいたことを日常生活の中で定着させる指導も今後、必要になると思います」。
京さんは「プログラムの映像教材は主人公が中学生ということもあり、生徒は『自分も思い当たる節がある』と感情移入しやすく、様々なことに気づくことができました。Honda のプログラムを私なりにアレンジすることで、教育現場に求められている『主体的・対話的で深い学び』を実現できたと思います」と、今年度は中学 3 年生の社会（公民的分野）の「交通」を題材にする授業の中でも Honda のプログラムを活用する予定だという。

Close Up クローズアップ 教育手法

学校の放送室から教室のモニターへ 非接触型の交通安全教室を推進

（一財）長野県交通安全教育支援センターは県民の交通安全意識の向上を図ることを目的に幼児とその保護者、小・中・高校生、高齢者へ無償で出前型交通安全教育活動を推進してきた。コロナ禍に対応するため、同センターは学校の放送室を活用した非接触型の交通安全教室を昨年の秋から実施している。
同センター事業部主任 宮澤まゆみさんは「昨年の春は学校が休校になってしまったこともあり、恒例となっていた春の交通安全教室はすべてキャンセルとなりました。秋から徐々に再開したものの、ソーシャルディスタンスの確保などを考慮すると、コロナ禍以前のやり方で行うのは無理だとわかりました。そんな時、ある小学校の先生から Zoom を活用してできないかという相談を受けたのです。これが非接触型の交通安全教室を始める第一歩でした」と振り返る。この時は小学校の空いている教室で交通安全指導を行い、ノートパソコンを通じてその様子を児童がいる各教室のモニターに映し出し実施した。この経験をもとに放送室を活用することにしたそうだ。
学校には必ず放送室があり、撮影や配信のための機材を備えたスタジオが併設されている学校も少なくない。そこで、放送室から各教室のモニターに指導を配信するという形を基本としたのである。
「これまで対面による指導にこだわってきたので、子どもたちの表情を読み取りながら進められないことには不安がありました。それでも受講してもらったほうがいいと、この手法を推進していくことにしたのです。指導の映像を見せるだけでは、既製のビデオと変わらないので、途中で私たちから問いかけをしたり、子どもたちに身体を動かしてもらったりする要素も盛り込むように工夫しています」。
5 月 21 日、同センター指導員の松本綾子さんと酒井美弥さんが松本市立開智小学校で交通安全教室を実施した。まず、1、2 年生（194 名）を対象に歩行教育から始まる。ここでは Honda の交通安全教育プログラム「あやとりぃ ひよこ※1」を活用。交通場面が描かれた大型のワークシートを使って、道路の歩く場所や歩行者用信号機の色の意味を放送室のスタジオから説明。その様子を児童は各クラスの教室にあるモニターで視聴した。途中、「右側はどちらですか？右手を上げてみましょう」と指導員が画面を通して呼びかけると、教室の児童は右手を上げて反応。最後は指導員が手を上げて右、左、右を確認する動作に合わせて、児童もそれを実践した。
1、2 年生が終わると、次は 3 ～ 6 年生（402 名）を対象とした自転車教育。ここでは Honda の「小学生 自転車の交通安全※2」を活用。指導員のノートパソコンに表示している映像資料（スライド）を教室のモニターに映しながら、自転車の点検や正しい構え（乗車姿勢）、自転車が走るべき場所について解説していく。指導員はモニターに狭い歩道を走る自転車の前にベビーカーを押している人がいるイラストを表示させ、「このような時、皆さんはどのようにしますか？クラスで意見を出し合ってください」と 1 分間、児童に考えてもらう。そして、正しい対応のイラストを映し、「自転車から降りて押して歩く、止まって待つなど、歩く人の迷惑にならないようにします」と説明した。
児童が受講する様子を見守った同校校長 玉水智香子さんは「モニターを通しての交通安全教室でしたが、指導員の方から問いかけなどがあり、子どもたちは目の前で行われている感覚で参加できたと思います。ここで子どもたちが身につけた知識を実際の道路で実践できるよう今後、私たちがフォローしていきたいと考えています」と感想を語った。
「学校によって設備や要望は様々なので、私たちも 1 回 1 回が勉強で試行錯誤を重ねているところです。交通安全教室の中止を検討している学校に対して、非接触型の手法を提案することで開催につなげたいと考えています。コロナ禍が終息して、対面での交通安全教室をすることが一番の願いです」と宮澤さんはいう。

※1　4 ～ 5 歳児を対象として歩くことに焦点を当て、「どこを歩くのか」「どのように歩くのか」を考えてもらいながら交通安全の基本を学ぶことができる交通安全教育プログラム。詳細は以下のホームページ参照。
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/
※2　小学生に自転車のルールや知識と安全な乗り方を身につけてもらうことを目的とした交通安全教育プログラム。DVD に映像資料と指導マニュアルが収録されている。詳細は以下のホームページ参照。
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/teaching_materials/bicycle/

1、2 年生には「あやとりぃ ひよこ」を活用。放送室のスタジオの様子が各教室のモニターに映し出される

児童は映像を見るだけでなく、指導員の呼びかけに合わせて答えたり、身体を動かす

昨年、長野県内で発生した小学生の交通事故データを見せながら、歩行中の事故は 1、2 年生が多いことを伝える

3 ～ 6 年生には「小学生 自転車の交通安全」を活用。指導員のノートパソコンに表示している映像資料を教室のモニターで児童に見てもらう

速いスピードで走っている時は左ブレーキで速度を落とし、最後に右ブレーキをやさしくかけるという安全なブレーキのかけ方を練習

自転車用ヘルメットの効果を示す実験。風船は硬いものに叩きつけると割れてしまうが、ヘルメットで保護すれば叩きつけても割れない